

## シベリア抑留記

滋賀県 山中重夫

### 終戦を迎えて

昭和二十(一九四五)年八月十五日、通化の街は快晴で暑い日であった。この日は休日で、朝から洗濯を手早く済ませ、身の整理をして昼前に戦友と外出をした。町外れの農家で休息をしていると同部隊の兵隊が急ぎ足で帰ってくる。まだ昼を少し回った頃で帰るには早い気がしたので隊員の一人を呼び止めてなぜそんなに急ぎ足で帰るのかを尋ねた。するとその兵は「日本は戦争に負けたらしい、天皇陛下の放送があったそうだ」と言った。私達は驚いて市内へ行くのを止めて直ぐに帰隊した。部隊に帰ると将校が一人日本刀を抜いて暴れている。我々はしばらくその様子を見ていたが係わり合いを恐れてすぐ隊舎に戻り戦友達と今後我々はどうすればよいのか案じていた。もとより願っている。

(三重県 森 勇生)

死を覚悟してのことではあるが予期せぬ事態なので皆が動転していた。しばらく時間がたつてから各班に対し中隊長から、戦争は終わった、今後の行動はハルピンの本隊と合流した上で決定されるから落ち着いて行動するようにと伝達された。しばらくして各班に使役の召集があり、隊が保有している甘味品や酒の支給があった。我々兵は酒保などへ行ったこともないし、長い間口にするものなかつた羊羹をもらって食べた。酒は飯盒の蓋に入れてもらったが、私は酒を飲まないで班長の所へ持って行ってあげた。班長は煙草を返礼としてくれた。

八月十八日、ハルピンの郊外新香坊に駐屯の本隊が駐屯地を列車で出発したという知らせが入り、八月十九日、通化駅にて合流、全隊列車にて南下、満鮮国境を通過平壤に到着した。私はそのまま更に南下し釜山港に行くものと思っていたが、将校の会議の結果平壤駅で下車することになった。これは米国とソ連との戦争期間の長短やソ連とは相

互不可侵条約が結ばれていた状況判断による結果であったと思う。従って全員下車し直ちに市内の国民学校に宿営する。

### 武装解除と抑留

八月二十六日、ソ連兵がマンドリン状の銃を構えながら我々の宿営する学校に到着、直ちに校庭にて武器、所持品を並べよと言ったのでその指示に従う。このとき我々の武装は解除され時計、指輪などの所持品はソ連兵によって略奪されたのである。また、身体検査の結果、症状の悪い人は延吉の病院へ送られたようであった。その後我々はこの国民学校を出て朝鮮軍の演習地であった三合里という所へ行くことになる。

昭和二十年九月二日、国民学校を出発、徒歩で三合里収容所に移動収容される。収容所の出入口は一カ所で、収容所内には見張り所が何カ所か設けられ、常に銃を構えたソ連兵が脱走者が出ないように監視にあたる。

我々がこの収容所に入つてより朝鮮軍、関東軍

軍人が続々と収容されおおよそ一月で三万人を超える人達が収容された。なお我々は収容所入りが早かったので建物内で起居していたが、後続の人は天幕などを地面に張るなどの仮設所のため、特に降雨時は非常に難渋されたものである。

我々の入所後の生活は毎日平壤市内に起居するソ連軍将校などの宿舎の清掃やソ連軍関係施設の清掃などに従事することで、毎日迎いのトラックに方面別に分乗してソ連兵の護衛付で出向き、夕刻になると迎いのトラックにて収容所に入る毎日であった。

少し話はそれるが、我々は輜重兵団のため当然馬と一体の行動であったが我々が収容されると同時に馬もソ連軍に引渡された。その後その大切にしていた馬がどうなったかは分からなかった。しかし三合里の収容所の内外に、食べ物を与えられず、また、足を痛めて三本足でふらつきながら涙目で泣き声をあげている馬を見ると可哀想で胸が痛んだ。だがその馬の姿は、ひと月もすると、も

に残っていた。

### シベリア抑留地への旅

昭和二十一年六月十七日に至り我が隊はいよいよ三合里の収容所を出発することになる。平壤駅まで徒歩で行く。駅から列車に乗り、降りた所は興南港であった。ここには日本チツソの工場があったように記憶している。

同年七月二日頃黒い船体の貨物船に乗船、沿海州沿いに航行、ソ連領ポセットにて下船、ダモイ東京が嘘でだまされたか、やはりと皆が気付く。

この時期は梅雨の気候、よく雨が降っていた。船から降りて港内の仮収容所にいったん落着いたが、ソ連軍の連絡の悪さか食事も与えられず、皆落胆と不安のため誰も口を開く者はなかった。やがて夜も更けようとする頃食事受領の連絡があり、各班から二人の者が受領に行った、雨の中であった。食事は黒パンである、初めて見るパンであった。よく見ると黴付のパンであった。

七月五日頃だと思ふ、大型の貨車が入ってきた

う見掛けることはなかった。或る日のこと、私がいつものように使役から帰ってくると、将校収容所におられた同郷出身の福島淳士郎少尉が、滋賀県の守山出身の者はいないか、と言って捜しておられたと聞き懐かしかったが残念に思った。その人は間もなくダモイ東京と言ってシベリアの地へ行かれたそうである。

三合里の生活でも食事は本当に貧しく粗末なものであった。我々は通化から隠し持っている高粱、粟、豆粕、などを煮て、細かく砕いた岩塩で味付けするとか、或いは道端に自生するニラなどを持ち帰って野菜の代りにするなどのほか鱈の干物を棒で叩き骨を砕いた身を水でやわらかくして他の物と一緒に食べるなど苦労しながら一日一日を凌いでいた。

収容されて半月ぐらいしてからだと思ふ、大勢いた人達が千人か千五百人単位で収容所をどんどん出て行く、ダモイ東京の言葉とともに。我々は、早く収容されたが、ほぼ最終までこの三合里

(人が両側に足を伸ばして真っ直ぐ寝ても人が通れるだけの広幅の貨物車であった)。その貨車に百人ぐらいの者が詰め込まれ、行き先も知らされぬままの輸送が始まったのである。貨車は西の方向を向いて走り始めた。が、どういう訳か少しもスムーズに走らない。昼間走ったり、昼間走らず夜に走ったり、或いは一日、二日引込線に入ったまま全く走らなかつたり、実に我々としては理解に苦しむようなゆつくりとした運行であった。

食事は、十両編成の最後部に監視兵が乗っていて、その所に黒パンが集積されていて時刻がくると支給されることになっていた。一人当たりの支給量は二五〇グラムぐらいであったと思う。飲み水は停車した所にある給水塔の水をもらって容器に溜めておき空腹を癒した。自然現象については貨車が停車した時に貨車の近くで一斉に並んで或いは屈んで済ませたものである。

ポセットを出てからおおよそ二十日余り過ぎた頃であろうか、たくさん線路の布設があるが、建物

のない駅に着いた。例によって給水塔を見付けての水くみのため貨車を降りたところ監視兵が大声をあげて我々を制止した。「ここは先の大戦の聖地である、脱帽して静かに行動するように。」と注意をした。なるほど暗い貨車の中から急に明るい車外に出たので分からなかったが、この辺りを見ると数多くの戦車か自動車の焼け焦げた残骸が一面に放置されている情景がはるか遠くまで続いており、水をくもうと思っている給水塔も蜂の巣のように銃弾の跡が見受けられ、いかにも大戦争が展開されたことがよく理解できた。また、未だに何の手も付けられず放置されていて身の毛のよだつ思い。多くの若い生命の散った聖地だと言われることが充分理解でき、思わず脱帽して手を合わせ祈ったことが思い出される。後で分かったことであるがこの地はスターリングラードと言い、ロシアのヴォルガ川西岸に位置する南ロシアの重工業都市で独ソ戦に於いて戦車戦闘が繰り広げられた最大の激戦地として知られる町であった。今ス

降りたところは四方奥深い樹木の繁る谷間の台地であった。そこには粗末な平屋建の長屋が五棟ほどと監視人の詰所、野菜小屋一棟の收容所であり、以前はドイツの捕虜が收容されて道路工事をさせられていた收容所であった。我々はその工事を引き続いて行うためここまで来たようであった。さて、我々は各々部屋割りの指示に従って室内に入った。途端に巻脚絆が真っ黒になっているのに皆が気付き外に出てよく見ると、なんと、蚤がビッシリ脚絆に付いていた。この時から私等は蚤と虱との戦いが始まった。我々はその蚤を払い落とし裸になり建屋の床板をめくり上げて床下の砂を掻き出すとともに辺りの倒木や枯れ枝を集め谷川の水をくんで湯を沸かし、その熱湯を床下に撒いて応急駆除を行った。この收容所は原生林の谷合いの台地にあり、監視人によると、よく狼が出るとのことであった。

以後我々はここを狼谷收容所と名付け毎晩ラーゲルの四方に篝火を焚くこととし、交替勤務によ

ターリングラードはヴォルゴグラードと改称されている。我々は更に南下し、昭和二十一年八月三日の早朝カスピ海と黒海の間中に位置するトビリシ（現グルジア共和国の首都）に到着、不自由かつ、暑い時期の貨車内生活から解放される。トビリシに下車した我々は相も変わらずトラックに積み込まれてコーカサスの深い山中に送り込まれる。

余談ではあるがソ連人は髪の毛の白い人、茶、栗色、黒い人など多種である。山の中への輸送されている途次、或る集落を通過していると、多分我々をソ連の凱旋軍と勘違いしたのであろう、煙草やパン、菓子などをトラックに放り入れてくれた人達がいて驚いたり嬉しかったが、一年後にその集落を通った時は「ヤポン、ヤポンスキー」と言って石を投げつけられるなど忘れ得ぬ想いもある。

#### ラーゲルの生活

八月三日夕刻、夏のことでも未だ陽も高かった、我々が目的地へ着いた。トラックから

り篝火を絶やすことなく焚き続けた。

この薪取りは昼間の作業終了後当番が近くの樹林の中から拾い集めた。

いよいよ翌日からはドイツ人が働いていた後を引き継いでの道づくりである。長柄のスコップ、一輪車、発破をかけるための穴掘り用の長いのみ、ハンマー等が工具として与えられる。既設の幅三メートルぐらいの道を十メートル以上に拡張する作業で四、五人が一組となり、監督が割振る仕事を完了するもので、これの出来具合を監督が査定してそれぞれのグループのノルマの評定がされてパンの量目につながることになる。岩盤の多い区間は共同作業でハンマーと鑿のみで穴をあけ、その穴にダイナマイトを仕掛けて爆破し、砕いた岩石をターチカという一輪車で反対側の土手へ捨てる作業が毎日の仕事であった。この労働は重労働でまた過酷なもので現場監督は仕事の進捗状況や仕事振りを見て常に「ダバイダバイ ラボーテー」と口やかましく急き立てた。

さて、私達は先述の通り極寒のシベリアではなく比較的気候温暖なコーカサス地方であるため、在留したひと冬に二回程度の降雪を見た程度で、この点についてはシベリアの地で労苦に耐え忍んだ同朋よりは幸せであったと思っている。

このラーゲルにおける食事は、毎日、朝と昼の食事として（但し、日曜日は除く）小麦粉を練って直径五センチメートル、厚さ一センチメートルほどの平たくして蒸し上げた団子が六〜八個支給される。それと小匙二杯分くらいの白砂糖が与えられた。私は朝食、昼食の二食分の団子を朝のうち一度に食べ、昼は別途に調達した馬鈴薯を谷川で洗い、ゆがいて、予め砕いておいた岩塩をふって食べていた。白砂糖は毎日のものを溜めておいて日曜日にぜんざい風だんご汁として食べていた。夜の食事は黒パンで、班の当番が三段階くらいのノルマに応じてその人ごとに分配された。例えば、よく働いた人は三五〇グラム、普通に働いた人は三〇〇グラム、やや皆より劣る人は二五〇

路と同じように止ったり動いたり不定期の状態北上し、東に向きを変えて輸送される。時々ダモイ東京の声が出て、またたまされるのではないかと皆が思っていた。しかし、かつての往路と違って比較的昼間の運行も多かった。主要駅なのであろうか駅のまわりにはきれいな草花が咲いていて平和を思わせる所もあったが人影はなく、駅といってもプラットホームがあるだけで駅舎のような建物というものはほとんどなかった。

狼谷のラーゲルを出て二十五日余り過ぎた頃、車中も徐々に寒さを感じるようになった。

九月七日頃だと思う、夜中頃から急に物凄い寒さで服の上から毛布六枚をかぶっても冷え込みが強いので一晩中眠れなかった。この頃バイカル湖の沿岸を通っていたようであった。

九月十二日貨車は一カ月余りの日時を経てソ連領東岸の港ナホトカに到着した。

帰還

倉庫群の中の仮収容所に入り約十日余り、ここ

グラムなどのように、評定は毎週ごとに査定された。野菜などの給与はほとんど無かった。それで我々は山に生えているやわらかそうな草をつんできて、食べられることが分かれば塩味を付けて食べていた。時にはデンデン虫を焼いて食べたこともあった。

ラーゲルに入ってから半年余りもすると仕事場の昼の休憩時間を見計らって近くの住民が来るようになり物々交換をするようになった。住民はパン、タバコ、我々は肌着や風呂敷などの布類と交換したのでついに着の身着のままの状態になった。この頃から健康を損なう人も多く全員が栄養失調になっていった。ラーゲルに入ってから一年を過ぎた昭和二十二年八月十日、ラーゲル退去の命令が出た。我々は輸送のトラックの到着を待ってこの狼谷の収容所を出た。監視員の見送りを受けてトラックに分乗、一カ年の重労働と生活をしたラーゲル後にコーカサスの山に別れを告げた。やがてトビリシの駅に着く。そうして貨物車に乗せられ、往

での生活が始まる。毎日点呼の後港湾の広場に出て赤旗の歌を強制的に歌わされる。その後、共産主義、日本の帝国主義の洗脳教育を受ける。これを受けている態度や言動を監視する日本人がいて、この人達の意に添わない者はすぐさま他の収容所に戻されるようであった。我々はここまで誰一人落後することなく生死を共にして来たのであるから皆無事に帰るためにもここでは言われるままに行動しよう、と言いつけられた。いよいよダモイ東京だと言われても朝鮮出港のこともあるので心底半信半疑での毎日であった。

九月二十一日、我々は仮収容所から港の広場へ出た。身の回り所持品等の検査を受ける、この時においても時計、革製品、タバコケースなどは没収された。ようやくして人員点呼が始まる。人員点呼は四列縦隊に並ぶが一度に計算できぬのか中途まで数えては、また初めから数え直すので皆の笑い種になっていた。沖を見ると大きい船体の船が見えた。日の丸を掲げた船である。今度は本当

に日本に帰れるのかな……と思った。早く船に乗りたい、また連れ戻されないうちに早く乗船したいと思わず祈ったものである。やがて引揚船に乗船した。引揚船興安丸である。船が港ナホトカを出る時は穏やかであった日本海が時間の経過とともに風波が高くなり甲板の横揺れがひどくなった。船長から、甲板に出ないように、との注意がなされた。しかしこの揺れでほぼ全員が吐き出して青い顔をして声も出なかった。興安丸は当初北海道へ寄港すると聞いていたが台風を避けるため進路を変え舞鶴港へ入港すると聞いた。

九月二十四日、私達は三日間の船旅を終えて懐かしい日本、舞鶴港に入港した。船から降りて棧橋を渡り上陸しようとしたとき、頭の上から足の先まで、首筋から背、腹のままで白い粉の洗剤を受けたのには驚いたものである。日本の山野は美しかった。お帰りなさい、ご苦労様でした、地域の女性の皆さんの出迎えと労いの言葉を聞いて、本当に日本へ帰れたんだと実感した。舞鶴の宿舎

町役場へ就職した。昭和二十三年五月から勤務するようになった。

昭和二十七年四月戦傷病者戦没者遺族等援護法が制定された時、私は厚生係を担当していたので遺族会との連絡を密にしながら遺族年金の請求事務を進めるため、昼間は遺族の方との面談、書類の作成、夜は添付のための戸籍除籍の謄抄本の作成に没頭した。特に満州やシベリアに於いて戦病死された記録を浄写するときは、その地での労苦を偲びながら筆を走らせたものである。

#### 帰国後の生活

私達の年代の者は、少年期から青年期、波乱に富んだ辛く苦しい時代を経てきた体験がある。私は復員後四十四年間という公務員もしくは公共的団体に勤務しそれぞれの場所での勤務振りを認められて数多くの表彰等を頂いたが、このことは若い時代の労苦が基肥となって長い間頑張ってきたものと思料しているものである。

末尾になったが朝鮮、満州、また極寒のシベリ

にて入国手続きや検疫等の手続きを済ませたが帰宅までの間は大変長く感じたものであった。

九月三十日、帰宅にあたり旅費等を頂いて舞鶴駅から京都駅へ、京都駅には予め電話連絡していたので父が迎えに来てくれていた。

東海道線のホームに出て列車に乗る。約三十分、郷土守山の駅で下車、駅から六百メートル余りの我が家へ帰る。「ただいま」と言って敷居を跨ぐ。我が家は通り庭になっていて入った所は店舗である。二つ目の引戸をあけたら母が立っていた。私は思わず母の肩を抱いて「ただいま」と一言いったまま母も私も言葉が出ず涙していた。その夜の夕食は粥であった。近くの復員兵が帰還した喜びのあまり栄養失調や胃腸が弱っていたのに赤飯やたくさんのご馳走を振舞ってもらったところ胃腸をこわしてそれが元で死亡されたことも母が話してくれた。私は母の思いやりを嬉しく思ったものである。しばらくの月日がたつて水膨れになった体もようやく元の体に戻った頃、ある人の紹介で

ア、ソビエトで散華された多くのご英霊のご冥福を念じつつ拙文を終える。

#### 【執筆者の紹介】

生年月日 大正十四年三月十日  
父山中重之助、母山中ちゑの二男として生れる

#### 略歴

昭和十四年三月 守山尋常高等小学校卒業

同 十一月 守山郵便局に就職

十七年七月 守山郵便局退職

同 八月 富士物産(株)入社

十八年五月 徴用令により呉海軍工廠総務部に入廠

十九年十月 呉海軍工廠徴用解除

現役兵として京都伏見第四〇部隊に入営

同 十一月	関東軍独立輜重第五 八大隊に転属	公 職	昭和五十八年十二月	民生委員、児童委員 担任（厚生大臣）
二十年三月	関東軍補給監部に三 カ月間派遣（暗号教 育受講）出向	平成十年十二月	守山市民生委員、児童 委員協議会長に就任	守山市民生委員、児童 委員協議会長に就任
同 六月	原隊復帰			副会長等歴任
同 八月	通化作戦の陣地構築 のため通化に転戦 終戦、平壤にて武装 解除、抑留	十三年十一月		民生委員、児童委員退 任
二十二年九月二十一日	ナホトカ港出航	十七年六月		滋賀県市町村職員年金 者連盟会長に就任
二十二年九月二十四日	舞鶴港上陸			全抑協滋賀県連合会守 山支部長、県連合理事、 現在に至る。
二十二年九月三十日	兵役解除	十一年七月		（滋賀県 林 憲一）
二十三年五月	守山町役場奉職			
五十五年三月	右 退職（定年）			
五十五年四月	法竜川沿岸土地改良 区に就職（事務局長）			
平成四年四月	右 改良区退職 家業に従事 現在に			